

---

# とある科学の心理掌握

無縁塚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の心理掌握

### 【Nコード】

N3778N

### 【作者名】

無縁塚

### 【あらすじ】

「記憶を取り戻したいですか？」

冬のロンドン。大学からの帰り道、一切の記憶を喪失していた青年は、霧の中でブレザー姿の少女に出会う。迷いつつも彼は少女の誘いを受け入れ、絶大な力と共に苦悩にまみれた日々へと堕ちていく。

蘇る妄執。チャンスという名の甘い罠。少女の抱える闇。科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。！

## 第一話・夢の始まり（前書き）

もう一つの方も合わせ、スローペースで……

## 第一話：夢の始まり

「……………誰かに見られている」

と、呟いたところで現状が変わるわけでも無いのだが、背筋を伝う不快感に青年は思わず口に出してしまふ。

立ち止まって周囲を見回すが、青年の通学路の丁度中程に位置する公園は、今日も変わることなく静かな空気に沈んでいる。

誰もいない。今日は冬のロンドン名物とも言える霧がかかっているが、じつと視線を寄越すような人間がいれば分かるというもの。

「……………」

冷えていく体は、外気のためだけではない。

普通の人間ならば過去の記憶から似たような体験を拾い上げ、それらは全て勘違いだったと自分を励ますのだろうが、彼にはそれが出来ない理由があった。

夜トイレに行けない子供のような曖昧な恐怖に包まれるのは、青年の主観では初めての出来事。

「……………気のせい、ではないはずだが」

良く目を凝らすと、公園の入り口辺りに犬を連れた老婦人がいるのが見えたが、多分違うだろう。

そうして辺りを見回す間にも、粘つくような視線に晒され続ける。勘違いで済ませるには、青年は鋭敏過ぎた。

一歩も踏み出せず立ちすくむ彼の耳に、コツコツと規則正しい革靴の音が届く。

頬を、冷たい汗が伝い落ちる。

その音は明らかに青年の方へと向かっている。そう分かっているも振り向くことが出来ない。日常よく聞くなんてことのない靴音も、深い霧の中では得体の知れない怪音に変質している。

背後から近づいてきた足音は、後十歩程のところまでピタリと止まる。そのまま数十秒青年は待ったが、向こうは声をかけるつもりが無い

のか、依然としてこちらをねめつけてくるばかり。  
意を決して、勢い良く振り返る。

まず視界が捉えたのは、腰本までの長く、混じり気のない黒髪。白い霧とのコントラストに艶が際立っている。

次に、その滑らかな毛が縁取る小柄な体。頭二つ以上背が低いだろうか。服はシングルタイプのブレザーに灰色のプリーツスカートと、あまりこちら辺で見かける恰好ではない……が、別段おかしい姿でもない。

(……なんだ)

結局のところ、青年の前に立っていたのは、お化けでも怪物でもない、極普通の女学生であった。

下らないことに神経を使ってしまった、と内心肩を竦めながら青年は再び歩き出す。

徐々に女学生に近づいてくるにつれ、佇む彼女の顔立ちが明らかになっていく。

(これはまた、随分……)

自然、眼が惹き付けられる。

女性の美醜にあまり頓着しない青年でも、思わずため息をつきたくなるほどに女学生は美しかった。

柔らかいラインを描く柳眉、磨き上げられた白磁のような肌、黒目がちな瞳、桜色の形の良い唇……それら全てが統合され、彼女の容貌はある種の異質さを感じられる程整っている。

気を抜くとそのまま歩みを止めてしまいそうになり、青年は意識して視線を逸らし、彼女の横をすれ違おうとする。

視界の隅で、少女がクスリと笑みをこぼしたのが見えた気がした。

「んんん……素粒子物理、とは随分皮肉が効いてますね。貴方の過去の功績に照らせば」

今度こそ、青年の心に明確な恐れが沸き上がった。

首を巡らすと、パラパラと少女がハードカバーを流し読みしている。その本は、確かに肩にかけたバッグの底に入れてあったはずのもの

だ。

「な、にを……」

どうやってそれを取り出したというのか。

上擦った声が聞こえたのか否か、少女は青年に向き直ることもせず、独り言のように呟き続ける。

「んーまあ偶然でしょうね。英国の方はお堅いから。これにユーモアを見い出せるかどうか……」

「……僕に、話しかけているのか？それに、その本……」

とりあえず会話は出来そうだと、青年の声にも幾分か普段の調子が戻るが、未だ震える語尾が隠しきれない。

少女は面を挙げ青年の顔を見、またクスリと笑みをこぼす。

「ん？貴方の大学での専攻についてですよ、勿論」

「それがなんだというんだ？何が言いたい？」

「んーですから、過去の貴方と現在の貴方では、修めている学問の本質が同じでも対極に位置づけられるために、そこに興が感じられると、そう言ってるだけです。大したことじゃありません」

一瞬、二人の間に静寂が降りる。彼女の返事の中にはとても聞き逃せない言葉が含まれていた。

「……知っているのか？過去の僕のことを」

「ん、そうですね。情報としては。面識はありませんから。ああ勿論、貴方が記憶を失っていることは知っています」

言って、少女は含み笑いを見せる。相手の欲するところを知っているがらとぼけるような、あまり愉快にはならない表情。

記憶を失う前の自分のことを知りたい。当然青年はその欲求にかられたが、何故だか少女に頼みごとをするのは憚られた。

何か、途方もない見返りを要求されそうな、そんな悪魔めいた雰囲気を感じられたからだ。

関わらない方がいい、と直感的に判断した青年は投げやりな風に口を開く。

「色々話を聞きたいところだが、生憎とこの後用事がある。だから

ら……」

「ん、それは問題ありません」

すつ、とそこに少女の言葉が割り込んだ。

眉をひそめる青年に、少女はその笑みを変質させる。

それまでの微笑みから、獣が獲物を見つけたようなそれに。

逃がしはしないと、言外に告げていた。

「貴方が私の要件を聞いた時点で優先順位が変わりますから、確実に……さて、単刀直入に言つて、貴方は過去の自分を取り戻したいですか？」

その言葉に、青年は若干の違和感を抱く。

自分の知らない過去を話すというのならともかく、その言い方ではまるで失われた記憶を呼び起こす、と言っているようなものだ。

記憶は知識ではない。

経験した出来事に感情の動きが伴い、それが保存され、後から観測されて初めて『記憶』になるのだ。客観的な情報を伝えられたところでそれは知識以上のものではない。

勿論、それはそれで今の青年にとって価値あるものではあるが……

「……撫然、つまりぬ言い回しだな。過去は過去である。当然、過去の自分を知ったところで過去の自分にはなり得ない」

言つて、青年は不思議そうに眉をひそめる。

口をついて出たにしては不自然な、随分堅い口調だった。

「ん、誤解があるようですが、別に貴方のことを話すつもりはありませんよ？それじゃ取り戻すという表現は不適切です。ですから、記憶を蘇らせると、そう言つたつもりなんですが」

明らかに眉唾な話だった。記憶喪失は何かの拍子に偶発的に治る場合がほとんどだ。そんな簡単に、人為的な手法で復元できるはずもない。

なんて返事をしたものか、そう呆れた青年の視界が暗くなった。

少女が手を伸ばし、青年の顔を覆っていた。

「……！」

「ん、ん、そのままそのまま……さて、記憶を取り戻す手法にはいくつかバリエーションがありますが、貴方のように『二つ名』があった場合に最適なものがあります」

そこで少女は言葉を区切る。何か考えを纏めるように目を細める。そしてゆっくりと、その唇を綻ばせた。

「……伝承より紐解く」

厳かに告げた一言で、周囲の空気が重くなる。

青年は金縛りにかかったように動きを止める。掌からは少女の体温が伝わってくるのに、触れられた額はどこまでも冷たい。

そこは公園の片隅でありながら、少女と青年しかいない一つの異世界と化していた。

「かつて、天上に座した墮天使は、その身を表す三つの名前を保有した。……一つ、宿りし体の名。二つ、神より授かる天使名、三つ、全てを記した真の名」

それまでの底知れない不気味さとはまた違った、陶然とした調子で言葉を紡いでいく。それはいかにもな詠唱であったが、特別魔力は感じられない。準備段階だろうか。

……魔力？

そこで青年の思考が停止した。少女は相変わらず酔いしれるように口を動かしていく。

「さあさあ、教えて骨董屋<sup>キユリオデイラー</sup>。貴方の真名を教えてください」

「我は……」

知らず、青年の口が開かれる。目に見えない何かに押し広げられるように。

「地獄の底から引き戻せ。貴方の真名を取り返せ」

「我の、名は……」

「立ち止まること能わず。貴方の名誉は世界のために……！」



瞬間、脱け殻だった青年の心に、かつての記憶が呼び戻された。

勢い良く額にかかった掌を振り払い、込み上げてくる吐き気にしゃがみこむ。

喜怒哀楽 十数年に及ぶ人生の記憶が、奔流となって彼の意識を侵食し、仮初めの自分を破壊していく。

どれ程の時間が経ったか、愉快そうな顔のまま青年を眺める少女の前に、ゆつくりと立ち上がった。

そこに、先程までの冴えない面立ちは存在しない。

「……慄然。そもいかなる秘術を用いて我が記憶を復元した？娘」  
怯えも恐れも、体得した魔術の前には些少なこと。

少女を見据える瞳には何の感慨も存在しない。

青年、アウレオルス？イザードは問いかける。

かつて人々を救うために書を記し、夢に破れ、そして黄金錬成を極めた魔術師がそこに君臨していた。

「ん、ん、『力』ですよただの。さっきのは魔法使いごっここといいですか……興にからただけです。大体私に魔術は使えません」

しかし、少女は錬金術師の絶大な存在感を前にしても、風に吹かれる柳のように受け流す。

自分の優位は変わらないと、確信に満ちた表情だった。

「ん、そうだ……名前がまだでしたね。とは言っても、魔術師相手に真名を名乗るのは気が引けます。通称でご容赦いただけますか？」  
錬金術師は答えない。

そんな下らない戯言には興味がないと言うように。  
ふっ、と息をついて、少女は『通称』を口にした。

「『メンタルアウト  
心理掌握』と呼んで下さい。  
錬金術師」

## 第二話・接触（前書き）

本編で出てきたらどうしよう……

## 第二話：接触

かたん、と鉛筆を置く音に、周囲からは感嘆のため息が漏れる。指で用紙を叩くと、教官は僅かに驚いたような表情を見せた。

目隠ししている彼女にも、その感情は良く伝わってくる。

「もういいのか？」

「ん、大丈夫です。……可換環論なんて久々でしたが、案外出来るものですね」

常盤台中学の能力測定日。生徒の力をそれぞれに適した方法で計量し、数値の上での評価に帰着させる日である。

能力はレベルが上がる程規模が広がり、応用が効くようになるため、測定も大掛かりになる傾向がある。中にはプールに水を張って衝撃を殺さなければ測定すら不可能な生徒もいる程だ。

しかし、何事にも例外がある。

彼女 心理掌握は何気ない様子で窓の外を見やる。目隠しをしているにも関わらずに、だ。

彼女が捉えているのは校庭を挟んで百数十メートル先にある教室の中にいる、もう一人の担当教官の心の動き。

曖昧に、漠然と渦を巻く思考の中を覗き、その教官の手元にあるであろう鏡文字のエニグマ暗号で書かれた問題文を読み取り、暗記した換字表に照らし合わせ、回答を手元の用紙に書き記す。それが彼女に課せられた検査であつた。

これといった機材も必要としない測定だが、それは紛れも無くレベル5の域に達したものに許された超人業だ。

教官の合図と共に目隠しを外すと、差し込んでくる日の光に整った顔をしかめる。

「んー何が毎回つらいと言えば、この瞼を刺す光ですかね」

その眩きに、教室の外からはくすくすとおかしそうな笑い声が届いてくる。

取り巻き達もそれを直ちに冗談であると理解し反応を返す程度には、優れた人材が揃っていた。

心理掌握がゆつたりとした動作で教室を出ると、彼女を頂点とする派閥に属する少女達は口々に彼女を褒めそやす。

「いつものことながらすごいですわお姉様」

「ええほんとに、目隠しをされていながらその美しいお姿……しっかりと目に焼きつきましたもの」

「どこぞのガサツな超能力者とは比べるべくもございませんわ」

一人の悪戯っぽい顔と共に吐き出されたセリフに、内心肩を竦めながらも返事をする。

「んん、いけませんよ陰口は。あなたの可愛い唇には似合いませんよ」

力と言う事の大きさも見合せてませんけどね。と心の中で呟きつつ、心理掌握は賞賛を適当に受け流す。

自らの能力の精度を高めるため、常に人間の心理に触れていようと作った『派閥』であったが、人との係わり合いがこうまで面倒だとは思っておらず、彼女は段々煩わしくなってきた。

能力があればと軽く考えていたが、例えば今にしても、いきなり取り巻きが女王と呼ばれている自分を背後にすたすと歩み去ってしまったえば、周りの生徒はいぶかしむだろう。

それすらも押さえ込むために能力を使うのは負担になる。それでは何をやっているのだから分らない。

故に面倒ではあったが、彼女は「お友達ごっこ」を続けていた。こうして群れば色々と役に立つのも、また事実ではあったからだ。いざというとき自由に動かせる駒はあって損にならない。そう、自分の計画のためにも。

会話を交わしつつ廊下を歩いている彼女の目には、自分に媚びる周囲の姿など欠片も入っていない。その脳裏に浮かぶのは話に出てきたもう一人のレベル5。

どこの派閥にも属さず、努力だけで超能力者の座に上り詰めた、軟

弱な生徒達の中で唯一心理掌握が一目置く相手。

次は、超電磁砲レベルガンとの接触。その先のステップまでの猶予期間、できれば、自分に対して隙を見せる程度に親密な関係になれれば……一瞬、彼女の微笑みが鋭くなるが、周りの人間は誰一人として気づかない。彼女が能力を使ったわけではない。その無条件の尊敬の念が瞳を曇らせている。ただそれだけのことだった。

「……………げ」

常盤台中学に付属したシャワールームの一つ、「帰り様の浴院」の入り口の前で思わず御坂美琴は顔を引きつらせた。

その原因となった少女は白々しくもたった今気が付いたかのように微笑む。

「ん？……あら、御機嫌よう御坂さん。何か、わたくしの顔に付いています？」

「い、いえ御機嫌よう高天原さん……なんでもありません」

唇がむず痒くなるような挨拶で返すと、それは良かったですわ。とこれまたわざとらしく呟く少女。彼女の力が力なだけに、美琴あまり愉快な気分にはなれない。

たかまがはら えいみ 高天原影見。常盤台中学に在籍するレベル5の第五位にして、最大規模の派閥に君臨する女王様。そして美琴が最も苦手にしていく人間の一人だ。

「ん、ところで今日の測定はいかがでした？わたくしの方はどうも昨夜の寝不足が祟ったか、あまり調子が良くなかったのですけれども」

言いつつ、立ち話もなんだからとばかりにシャワールームに入る高天原。

美琴は一瞬このまま立ち去ってしまおうかと思ったが、後々面倒なことになりそうなので仕方なく後に続いた。

「そう、ですね、まあ私も不調と言つか……………」

中身の無い返事をすれば飽きるかと投げやりに応え、ついでに「あんなとは話たくない」と念じてみる。

「ん、ん、ん、またまたご謙遜を。わたくしの方まで揺れが届いてきましたもの」

……しかし相手は特に何も言及せず話を続けた。何かしら反応があつて良さそうなものだが、読心能力を使つてないのだろうか？ 目に見えない能力故に判別が出来ない。

脱衣所で服を脱いでいると周りから驚いたような視線が飛んでくる。無理もない。第三位と第五位は犬猿の中であるというのは周知の事実であるからだ。

最も、正確には第五位の取り巻きが勝手に自分にちよっかい出しているだけだったりするのだが、いずれにせよ見てみぬ振りをする態度には信用は置けない。

「それにしても、高天原さんから話しかけられるなんて意外ですね」服を脱いでタオルを巻きながら、少しばかり探りを入れてみる。

「ん、そうですね？……まあ確かに、あまり親しくはしていませんでしたね。もしかして、ご不快でした？」

「いえ、別にそんなことは……」  
応えて、美琴は直ぐにはぐらかされたことに気がついた。

顔を上げると、薄ピンクのバスタオルを身につけ、流れるような黒髪を纏う心理掌握の横顔が目に入る。

ともすると小学生にも見られかねない身体ながら、その表情は妖艶に、余裕の笑みを浮かべているような気がした。

まるで大人が子供をあしらうような。

やはり気にくわない。

「ん、残念ですね……超能力者同士、有意義な時間を過ごせると思いましたのに……」

「……！？ちよ、つと高天原さん！許可無い読心能力は犯罪ですよ！」

警戒が緩んだ隙にやられた。

不意を突かれて思わず小声で責める美琴に、心理掌握はおかしそうにクスクスと笑いを溢した。

一瞬、その口角が釣り上がるが、美琴の場所からは髪が邪魔になつて見えていない。

「んん、まさかカマかけにここまで引つかかってもらえるとは……」

ふふ、可愛らしいですね御坂さん。嫌われているのは残念ですが」

「……カマっ……アンタいい性格してるわね」

思わず本性が出た。

しまったと口を押さえて周りを見回すが、どうやら聞かれてはいなかったらしい。

勿論、目の前の少女は別にして、だが。

「んーその口調の方が似合ってますよ。これからもそう話していただければ嬉しいんですけどね」

「……え？」

さらりと言われた台詞に呆気にとられる美琴を残し、心理掌握は浴場の戸をくぐっていった。



### 第三話・提案（前書き）

お待たせしました。

### 第三話：提案

「取引？」

「ん、一言で言うならば。私の目的に貴方は……まあ、必要不可欠ではありませんが、いた方が成功率が格段に上がりますから」

錬金術師は糸のように目を細め、変わらず異質な笑みを絶やさない少女を睥睨する。

目の前の少女が果たしてどこまで知っているのかは定かではないが、先程の「魔法使いごっこ」の中で自分の蔑称と魔法名を口走っていた辺り、少なくともこちらが錬金術師であるということは理解しているはずだ。そしておそらくは、黄金錬成のことも……故に彼は不可解だった。いくら能力者らしき少女とは言え、黄金錬成相手に取引のカードなど用意できるはずがない。

「見返りに何を提示するつもりだ？娘」

心底つまらなそうな声色に、クツクツとまた少女は神経に障る笑いを返す。

「んんん、分かります分かります。確かに普通に考えて貴方相手に交渉の余地は存在しない。ただ一点を除いて、ね」

そこで一旦少女は区切り、とっておきのジョークを披露するような口調で……ジョーカーを切った。

「Index - Librorum - Prohibitorum……  
貴方を神の領域へと駆り立てた無垢な子羊の記憶を復元してご覧にいれましょう」

瞬間、空間が歪んだ。

「……いいたい事はそれだけか？娘」

変わらない口調、変わらない表情。しかし少女は確かに、凄まじい怒りの奔流が錬金術師があふれ出るのを感じ取る。

それに怯えるでもなく、挑発するようににたり、と少女は相好を崩す。

錬金術師の感情が振り切れた。

「直接死ね」

言葉に出すことでの思考に指向性を与え、脳内に明確なイメージを生  
成　そして解き放つ。

銃の引金を引くより容易い必殺の一撃が、少女を襲う……はずだった

「……何故だ」

アウレオールの顔から急速に血の気が引いていく。

少女は未だ、立ったまま。

もう一度強く強く、少女が死ぬところをイメージしようとする。

しかし、出来ない。

どれ程集中しようとしても、掌で掬った水がこぼれるように思考が分散してしまう。

「んんん、じゃんけんと同じですよ。勇者は虎に勝ち、虎は姫に勝ち、姫は勇者に勝つ……どんな力にも相性というものが存在します。貴方の魔術が逐一脳内を経由しなければ発動出来ない以上、私の心理掌握には手も足も出ません」

「……愕然。魔術師の思考を阻害するとはなんとという絶対性が……」  
ずり、と足元から乾いた音が聞こえる。

それは錬金術師が恐怖し、一步後退した音に他ならない。

そんな様子を気に留めることもなく、少女は再び口を開いた。

「んん、それにしてもいきなり殺しにかかるとは予想外……まあ確かに、これは貴方にとって己が全てをかけた挑戦でしたからね。誇りを傷つけられ怒るのも道理……むしろ、その方が私には都合がいいわけですが」

ちろちろ、と少女唇を舌が這う。あたかもご馳走を前に我慢しきれなくなつた獣のように。

あどけない少女のそうした仕草には可憐さなど微塵も無く、ただただ妖艶さが面に表れるだけだった。

「ん、ん、貴方が何を考えているかは貴方よりもよく分かっています。ですが冷静になって下さい。果たして、記憶を復元することがそんなに冒険的であるかどうか、を」

「……当然、我が目的はあの子を救うことに他ならない。必然、あの子の記憶を蘇らせることは手段であって目的ではない……自然、救われた者を救うことは出来ない」

錬金術師の顔に影が差すが、当然少女に同情の様子は無い。説得しようとする気概もまた、見られない。

そう、少女の力をもってすれば、こんな行動は本来無意味なのだ。

それでもわざわざ問いかけるのは、猫が鼠を弄ぶような悪意に満ちた好奇心に他ならない。

そしてうちひしがれた錬金術師には、そこまで気をまわす余裕は無い。

「んー？それはつまり意味が無いからやらない、と？……やれやれ、ですね。本当にやれやれですよ」

変化は突然。

草食動物に忍び寄る猛獣のように。

少女が牙を剥いた。

「……………！？」

冷静に目を凝らせば、ただただ少女が苛立って顔を歪めたただと理解できる。

しかしその気迫、視線は紛れもない獣のそれだった。

「救われた人間は救えない？……あのですね錬金術師！まさかとは思いますが！貴方に救いを求めた禁書目録と上条当麻に救われた禁書目録が同一人物だなんて勘違いはしてないでしょうね！？」

何故こんな簡単なことも分からないのか、信じられないとばかりの口調だった。

「同、一……？」

「記憶を喪失すれば人格なんて変わるに決まってるでしょう！人を人たらしめるのは人格に他なりません。……だから、別人なんですよ。ゼーんぜん違う赤の他人なんですー理解できました？」

「……否、しかし、それは……」

錬金術師は当惑した。

そんなもの暴論だと一蹴したい自分がいる一方で、なるほどと首肯する自分がある。

確かに、いくら知識が残っていようと、思い出の有無でその知識の使い方は変わってくるだろう。

もしその心のあり方の差異に着目するならば、例え体も知性も同一でも、それは別人と言えるかもしれない。

だが、しかし……

「憮然、ならば一層、我に出来ることなど何も無し。我に微笑みかけてくれたあの子はもういないのだから」

「……少し頭を働かせたらどうですか？常識に囚われ過ぎですね」  
ふん、と鼻で笑われて錬金術師は思い出す。

目の前の少女が何を提案したのだったかを……

「んー禁書目録は 否、貴方の禁書目録は、貴方のことをとてもとても大切に思っていたのでしょうか。言ったのでしょうか？『教えを破るうが』『忘れたくない』と。敬虔な十字教徒にとってこれ以上の言葉はないでしょうね。自分で口に出して気が付かないとは皮肉なものです」

残骸のようだった錬金術師の暗い瞳が焦点を結ぶ。

バッドエンドの憂き目にあって壊れた心が、萎れた植物が水を吸うように、急速に活力を取り戻していく。

「ん、ん、分かってくれたようで何より。死者に対して出来ることなんて何もありませんが、私は記憶喪失者を蘇生させることなら出

来ますから」

そこで言葉を切ると、少女は女王の貫禄をもって、錬金術師に止めを刺す。

「私の犬になりなさい。私の盾になりなさい。私を満足させた暁には貴方の物語を紡ぎ直してあげましょう」

錬金術師は自分が頷いたことにすら気が付かなかった。

## 第三話・提案（後書き）

感想どしどしお待ちしております。

## 第四話：過失

本当に、人生というものは何があるか分からない。

自分はその子を守るため、その他全てを切り捨てる覚悟を決めていたつもりだった。そうしてきたつもりだった。

だというのに。

「……全くもって、僕もあの男のことを笑えないようだね。一時の気の迷いが、ここに至ってまで引きずるとはね」

やはり自分には合わなかったのだろう。顔を焼いて治癒魔法をかけるなんて小細工は。だからツケがまわってくるのだ。

2メートル近い大柄な体躯に茜色の長髪を靡かせ、銜えタバコもまらずそうに男　ステイル「マグヌスは一人ごちる。」

世界平和を保っていた均衡が崩れかかっている今、イギリス清教所属の魔術師である彼は決して暇な身の上ではなかったが、つい先ほどあった上からの連絡で任務の優先順位が一気に逆転してしまっていた。

最初聞いたときは何かの間違いだと思った。思いたかった。

次に、相手の取りうる行動と、その力の強大さに鳥肌がたった。

何か明確な目的があるのは、ロンドンから忽然と消えた相手の手際からも明らか。

おそらく、その目的は……

チツ、とステイルは面倒な状況に舌打ちしながらも、足早に近代的なビル街を歩いていく。

どこに潜伏しているのかは分からない。しかし自暴自棄になった相手が、何の策も準備も無しにあの子の元に向かう可能性が一番高いように思われた。もしそれで見つからなければ風潰しに全世界を探さなければならぬ。

自分が撒いた種は自分で摘み取る。それが出来ないであの子を守るも何も無い。



スタイルは己の覚悟を胸に、迷いない足取りで目的地へと向かう。おそらくは錬金術師も向かっているであろう、とある学生寮へと……。

その頃、当の錬金術師はと言つと……

「んーつまらないですね」

「……撫然。それはこちらの台詞であろう」

……常盤台中学の女子寮にて紅茶を淹れていた。

価値の分からぬ者を嘲笑うかのような、非常に控え目な高級アンティーク家具で占められた一室。イギリスからはるばるそこへ連れてこられた錬金術師を待っていたのは、家具の手入れと掃除とティータイムのセツティングだった。

彼の名と実力を知る者なら耳を疑うような命令を、さも当然とばかりに押し付けられ、錬金術師はいぶかりながらも怒る気になれず、黙って従っていた。

数日の間で更なるグレードアップを遂げた部屋で給仕する姿は、二人の容貌も相まって一幅の絵画のようである。

「ん？いやいや、別に貴方がかつたるそーな顔しながら紅茶を淹れてることに對して言つたわけではありません 能ある鷹は爪を隠すと云いますが、隠したまま興に務めるのもまた難しいなと思いまして」

「……………」

また良く分からないもつてまわつた言い回しか、と気にも留めず、錬金術師はティーテーブルの対面に腰を下ろす。

「んーイギリスつて言つたらやっぱりスコーンですかね？」

「……………」

「ん……………今のは独り言じゃなかったんですが。まあいいです。今御坂美琴にアプローチをかけてるんですが、例え使わなくても能力がある、という自覚だけで会話が色褪せてしまつて、ね。それをつまらないと思つたんですよ。私には一生、スパイ映画のスリルは味わ

えない」

肩を竦めながら、心理掌握はポットを手にとりもう一つのカップに注ぐ。

琥珀色の液体で満たされた器を一瞥したきり、錬金術師は手をつけようとはしなかった。

「間然、なぜ能力を使わない心理掌握？」

「んんー人の話を聞いてました？勉強もそうなんですけどね、過程を楽しめないものは長続きしないんですよ。これ以上味気なくしたら投げ出したくなってしまいます」

「敢然、それでも効率を重んじるのが自然であろう」

錬金術師には珍しく、声に不思議そうな色を滲ませ心理掌握に問う。彼は学園都市へと来る道中で、少女の目的について聞かされている。聞いた内容は、とても遊び半分で成し遂げられるものではなかった。それゆえに、己の情感まで満たそうとする余分な行動が理解できない。

「ん、それだけではありません……何事も急は良くないんですよ急は。ごく自然に御坂さんと仲良くなったように見せないと、やはりどこかで歪みが出てきてしまいますから。それにあまり急ぐ必要性もありません。次のステップ自体既に取り掛かれる状態ですから」

「……なるほど」

興味無さそうに相槌を打った後、ふと気になったように相手を見た。「心理掌握。その計画は必要悪の教会ネセザリウスについて考慮に入れているか？」

「ん？当然です。というより私と貴方なら追っ手が来たところで…」

……」  
そこで口を開けたまま、何かに囚われたように目を見開いた。

「Fucking hell!! どうして思いつかなかったんでしょうー!!」

「……やはり。次のステップは君が禁書目録と接触することだったか。当然、向こうが我々を追跡すると思い込んでのことだろうが、

あのロンドンの神父は私の目的を知っている。ならば禁書目録の保護に向かうのが自然であろう」

錬金術師も心理掌握も、戦闘面において神父　ステイル？マグナスが脅威であるとは考えていない。しかし心理掌握の計画における次のステップは、『彼女一人で』成す必要があった。

オカルトに関して全くの素人である彼女では、ステイルが仕掛けていくであろう魔術的なトラップに対応出来ない。

勢い良く立ち上がった心理掌握は、焦燥にかられた様子を見せながらも何事か考えるように眉を寄せる。

「ん、ん、ん……錬金術師。取り敢えず禁書目録に感付かれないように神父に会えないか試みて下さい。もし相手が既に禁書目録に接触したようなら帰還して下さい。その場合何か仕掛けられる前に一人で何とかします。……貴方の黄金錬成、記憶も操作出来ましたよね？」

「当然……復元は叶わぬが」

「忘却で十二分。兎に角2時間程邪魔が入らなければ大丈夫ですから」

足早に部屋のドアから出ようとして、ああそうだ、と心理掌握は振り返った。

「17時丁度に携帯で連絡を入れますから、そしたら行動不能になった私の回収に来るようお願いします。もし連絡が無ければ、お手数ですが第七学区を探しまわってください」

「……間然、杜撰な計画だな」

そつと呟かれた言葉に、心理掌握は怒るところがおかしそうにクスクスと笑ってみせた。

「んん、意外ですね。貴方が憎まれ口を叩くなんて」

「……事実を言ったただだが」

返事を聞く前に心理掌握は退室していた。

「ねーとうまー」

「ん？なんだインデックス？」

「最近この寮の近くにお洒落な喫茶店ができたんだって」

「駄目だからな」

「ええー！？まだ何も言っていないのに！」

「インデックスさーん？家計簿の赤い字は綺麗だからプラスの意味だなーんて勘違いをしてらっしやいませんかー？」

「んな！ひとを馬鹿にしないでほしいんだよ！」

「だったら自分が言ってることがどうということなのか分かりそうなもんだけどな……」

「むう、た、確かに私は当麻よりたくさん食べるけど……いいじゃない喫茶店くらい。当麻のケチ！」

「一週間間食なしっていうんなら構わないぜ」

「う！？……ぐ、ぐう……仕方ないかも。背に腹は代えられないんだよ」

「……？インデックス、そんなに喫茶店が魅力的か？せいぜい出てくるのはサンドイッチとかケーキくらいだぞ？」

「別に食べ物のために言っただけじゃないんだよ。最近、おいしい紅茶を飲んでないなーって思ってる」

「……そうか、イギリスはお茶にうるさいんだっけ？まあそういうことなら……」

「ほんとっ！？」

「一週間間食抜きでいいならな」

「……ケチ」

かくして、運命の歯車は静かに回る。

## 第五話：下準備

「……やっぱりなーんか妙よね」

気まぐれに入った新規開店の喫茶店。奥の真新しいテーブルに頼杖をつきながら少女　御坂美琴は呟いた。

脳裏に浮かべるのは、最近ことあるごとに付きまとう少女の姿。

「高天原さん……ねえ。何がしたいのかしら」

最初はどうせ派閥に引き込みたいんだろうと決めつけていたが、いくらそのつもりはないと言っても嫌な顔一つしないところを見ると、どうも違うらしい。

ならば何か切っ掛けがあるのか、と聞いてみるものの、のらりくりとかかわされて要領を得ない。

よって何か下心があつてのアプローチだと美琴が考えるのも、ごく自然なことである。

しかし同時に、彼女は会話するときの楽しげな笑顔を思い起す。

もし、本当にただの気まぐれで自分と友達になりたくなつたというのであれば、彼女はそれを拒むつもりはない……その程度には、高天原に対して嫌悪感を抱いていなかった。

相変わらず信頼はしていないが。

「どちらかしらね。まあ、警戒するに越したことはない、かな？　なんせ心理掌握だしね」

呟いて　美琴はそうした見方がひどく不快なものであることに気がついた。

「……よくないわよね、そんな偏見」

頭から信用するのも危ないが、もう少し様子見して、大丈夫そうなら……

そこまで考えて顔をあげると、窓の外に見知った顔があつた。

「ん、ん……これはちよつとばかし不味いかも分からないですね」  
軽口を叩いて笑ってみようとするも、頬がひきつって上手くいかない。

いち早く禁書目録の住んでいるアパートに到着し、上条麻は適当に気絶させ、ステイルは返り討ちにするなり錬金術師をけしかけるなりすれば作戦完了。実に単純明快。

ターゲットが部屋に居れば、の話であつたが。

「んー最悪のタイミングですね。なんで外出なんて……」  
心理掌握は禁書目録の居場所を探索する術を持っていない。

故に後は錬金術師がうまくステイルを追い返してくれるのを願うだけである。

品位を損なわないぎりぎりまで足を速めて歩いていた少女の首には、肌寒い中幾筋もの汗が流れていた。

それらを薄桃色のハンカチで拭いながら、心理掌握は今後の予定を考える。

(このまま寮の前で待機する、か。能力を使えば不審に思う人間は誰もいない……いや駄目だ。いつ帰るかも分からないのに能力を発動し続けることなんて出来ない)

接触後の目的のためにも、余力を残す必要がある。

ならば近くに張り込みできる場所は……と考えたところで、背後から遠慮がちな声が聞こえた。

「あのーすいません。ハンカチ、落としましたよ」

「ん？ああ、ありがとうござい……」

振り返った先にいたのは、黒髪をツンツン尖らせた中肉中背……よ  
りちよつと筋肉質な少年の姿。

しかし心理掌握はそちらには目もくれず、少し離れたところにいる  
シスターへと向いていた。

「……？あの、あなたのハンカチですよね？」

「ん、あ、いや……すいません、ちよつと驚いてしまって。もしか

して上条当麻さんですか？」

思わぬ行幸に内心ほくそ笑みつつ、彼女は問い返す。

明晰な頭脳の内部で、急速に作戦を組み直しつつ。

「え？そうですけど……」

相手がキョトンした表情で答えた後、何故だかその顔を青くした。

その様子に若干引つ掛かりを覚えたが、心理掌握はそのまま会話を続ける。

「御坂さんからお噂はかねがね……なんでもただの一度の例外も無く全戦全勝だとか。是非ともお話を伺いたいですね。あ、私高天原影見と申します」

「ど、どうもご丁寧に……」

「とーまとーまー、その人当麻の知り合い？」

心理掌握はそこで初めて気が付いたようにシスター インデックスの方へと向き直る。

ティーカップを連想させる白ずくめの礼服に、銀の長髪。情報通りの姿だ。

「ん、よもやお二人の時間をお邪魔してしまった、とか？」

茶化すように尋ねるが、勿論彼女は二人がそんな関係でないことは知っている。

「？どういう意味が良く分からないけど……あ、そういえば短髪と同じ制服だね」

「ん？御坂さんのことですか？ええ、確かに彼女と同じ学校です……今上条さんにハンカチを拾っていただいて、折角だからお話しせてもらえないかとお願いしていたところですよ」

さりげなく視線を巡らせ、直ぐ近くに喫茶店があることを確認する。二人に予定があらうと無かるうと関係ない。彼女の能力の前では同じことだった。

「ふーん……私はインデックス。本名はもつと長いんだけど、呼びにくいからこう呼んでほしいんだよ」

「ん、インデックスさん……ですか。よろしく願います。それ

で、早速なんですがお時間よろしいですか？喫茶店もありますし」

少し、強引だったか、と上条の戸惑う顔を見て心理掌握は内心舌打ちする。

心に燻るのは苦い苛立ち。能力を使えば相手の感情なんて一掃出来るが、こんな簡単なことにも力を使わなければならぬ自身の脆弱さに腹が立つ。

心理掌握は自分の能力を信頼していない。後天的に付与された才能を盲目的に信じるのは馬鹿がやることだと考えてすらいる。

普通の人間が当たり前に出来ることは、能力無しで出来なければならぬ。能力を使うのは「普通の人間が出来ない領域」に足を踏み込む時だけにしなければ。

その線引きを誤れば、必ずどこかでツケが回ってくる。

……失敗は許されない。だからこそ念を入れて錬金術師を引き入れたのだ。

「ん………すみません、私一人で舞い上がってしまった。ご迷惑ですよね」

「え？いやいや、そんなことは。というか俺達もその喫茶店に行くつもりだったし」

構わないよな？と視線を送ったのだろうか。心理掌握にとっての本命は一瞬考えるような素振りを見せたが、

「当麻がいいなら、別に私はいいんだよ」と了承の返事をした。

「貴重な時間をありがとうございます」

それでは、と喫茶店の方に振り返った。

「アンタ………それに高天原さんも……」

さして広くもない店内。立ち上がった美琴と入店した3人が互いを認めるのは当然とも言えた。

美琴の呼びかけに当麻は少し驚いた顔を見せ、シスターは撫然とし



た表情。そして心理掌握は……渋い顔。まるで休日の余暇に無理矢理仕事の予定を入れられたような。

しかしよく目を凝らして見ようと瞬きした後には、その表情は緩やかな笑みに取って代わられていた。

見間違い？と思った途端、それ以上の思考を遮るように相手から声を掛けられた。

「ん？これはこれは御坂さん！噂をすればとは言いますけれど、面白い偶然ですね」

「え、ええ……ってなんでアンタ達二人が高天原さんというのよ」

「別に大したことじゃない。そこで落ちてたハンカチ拾ったら、御坂を通して俺のこと知ってたみたいで、色々話を聞きたいらしいから喫茶店に入ったただけだけど」

ポリポリ頭をかきながら、なんでもなさそうに言う当麻に、美琴は心理掌握へと目を転じた。

「ん、話といつても、如何様にして上条さんが御坂さんを負かしているのか。それを伺いたいただけですよ……ところで席、ご一緒にも？」

「それは、構わないけれど……」

何も気にかけてない様子の上に、美琴はもう一人の方を見る。案の定インデックスはムスーっとした顔でそっぽを向いていた。

その心理状態が彼女には手にとるようになってしまい、自分に否はなくとも何となく気まずさにとらわれた。

「あーなんていうか……悪いわね」

「……別に気にしてないからいいんだよ。大人数の方が賑やかなのは確かだし」

本当は二人で、ゆっくりお茶を飲んだりお喋りしたかったのかもしれない。

美琴の言葉に少しだけ表情を緩めるも、やはり不機嫌そうなのに変わりない。

なのに、その感情の機微を全然理解してない様子の上条と心理掌握。

美琴は自然にインデックスの隣に腰掛け、遠回しな非難を口にしていた。

「それにしても、随分性急なお話ですね……アンタも良くOKしたわよね」

「ん、それに関してはおっしゃる通り。ただ、この期を逃してはいつお話出来るか分かったものではありませんから」

「まあ急っていえばそうだけど、元から喫茶店入るつもりだったしな」

二人の返事に溜め息二つ。

ウェイトレスが注文を取りにくるまで、乙女二人はただただジト目による糾弾を敢行するだけだった。

## 第六話・辛勝（前書き）

今話はお食事中にご覧になるのはお勧め出来ません。

## 第六話：辛勝

「……そうやって真っ正面から現れてくれると、索敵のためにルーンを撒いた労力も相まっていい塩梅に肩透かしを感じるよ」

「当然、奇襲を想定したのだろうが、無闇に背後を取るのには貴様相手には危険だろう」

良く分かっているようで何よりだよ、とステイルは皮肉を込めて吐き捨てる。

大通りから一步入れば、学園都市も裏の顔を覗かせる。

スキルアウト……無能力者の烙印に耐えられず、現実から逃げたアウトロー集団。所謂不良が唯一大手を振って歩ける路地裏、それが彼らが再会した場所だった。

「……見たところ何かしらの目標を見い出したようだが、はつきり言っただけは吐捨物のスープからマシな具材を探してるのと大差ない。いい加減懲りるよ」

「笑然、どの口が言うか。妥協した貴様の生き様にこそその比喩は相応しかろう」

互いの視線が交錯する。二人にとってはそれで十分だった。

「イノケンティウス！」

先手はステイル「マグヌス」。

力強い宣言と共に、錬金術師の背後から形を持った炎が立ち上がる。灼熱の拳が持ち上げられ、振り落とされるまで瞬き1つ程。その間隙に錬金術師は考えを巡らせるように目を細める。

「鎮火せよ。赤熱の魔人」

髪先を焦がしたところで、竜王の息吹すら受け止めたイノケンティウスの姿が一瞬にして黒い液体へと還る。

そうした様子を見ることもなく、錬金術師は再び口を開く。

既にステイルは間合いに入り、詠唱を終えて現出した炎剣を突き出していた。

「その場に留まり、炎剣にて自らの首をはねよ」  
後少しで貫かれるタイミングで、しかし錬金術師は平常と変わらず、感情を廃した声で世界に命令を下す。

アウレオールの攻撃は完全無欠のようであり、一タイメージを固めないといけないため対多数の戦闘は不得手である。  
今のステイルの挟撃はまさしくその弱点を突いた一撃。

しかしアウレオールに動揺はない。当たらないことを見越しての冷静な対処だった。

「……ぐっ！」

驚愕の表情と共に宙に礫られ、ステイルの首が弧を描いて飛んでいく。

地に落ちる前に、その頭は燃え尽きていた。

そして 錬金術師はつまらぬ気に呟いた。

「倒れ伏せ、ロンドンの神父」

ばさり、と何かが倒れる音が背後から聞こえてきた。

「……間然。イノケンティウスを現出させつつ屋気楼を操る手腕は見事だが、自然それは小手先に頼らなければ我を打倒し得なかったと告白するようなもの」

ゆったりと振り向けば、大地に這い蹲り屈辱に顔を歪ませるステイルの姿があった。

錬金術師は僅かに目元を動かし、退屈にけぶり濁る視線を落とす。

「……下らぬ茶番であったな。そのまま」

死ぬと言うより早く、アウレオールは悪寒に突き動かされ宙を見上げる。

そこにいたのは 今地面に縫い付けられた男とまったく同じ顔の、  
凜猛な笑みを浮かべ手に炎をともした……

「、な」

屋気楼は2体あった。

そう理解するより早く、視界を紅蓮の炎が染め上げた。

\*\*\*\*\*

「ん、原理も過程も不明ながら、あらゆる異能力を打ち消す右手……ですか」

「つつつても測定機は相も変わらずレベル0の結果を打ち出してくるけどな」

「ん、やはり憤りを感じておられます？」

「ぜーんぜん。まあ認定してくれば支給金も増えるし、そこは恨めしいけどな」

「……なんていうか、アンタが言う理由っていつも間が抜けてるわね」

「はふうー紅茶おいしいんだよー」

興味津々……といった様子で話を聞く少女にいつも通りに本音のまま返す少年。

その様子に呆れる中学生と我が道を行くシスター。

オープンしたばかりの小洒落た喫茶店での時間は、各人の予想に反し盛り上がっていた。

聞き上手の心理掌握に気取らない当麻、要所で突っ込みを入れる美琴に感情豊かなインデックス。

あまり面識のない人間もいながら、ばらばらの個性を持っているからこそその明るい雰囲気であった。

無論、全員がそのお茶会を無邪気に楽しんでいたわけではない。そのわずかな綻びに気がついたのは美琴。

「高天原さん？ 顔色が……大丈夫？」

人一倍そうした機微に聡い彼女は、心理掌握の紫色の唇、カップを握る手の震えに目が留まる。

「ん？ んんん、そんなに悪く見えます？ いや、恥ずかしい話ですが、ちよつと月の障りが重くて」

対する心理掌握も体の異変を隠し通せるとは考えていない。

取り敢えず用意していた台詞を返しつつ、脳内で行われる情報処理に意識を戻す。

気を抜けばあつという間に自我を破壊される、そんな熾烈な演算は、まさしく彼女にとっての戦いだつた。

(これが禁書の毒……ダウンする前に入るかどうか……)  
ポチャン、と額の汗がカップに入るが、幸いにして誰も見ていない。第二ステップ……それは心理掌握自らがインデックスに接触し、ある一冊の禁書を盗み出すことだつた。

予想外の返事に若干顔を赤くする美琴とインデックスに、キョトンとする当麻。

もう少し勘が良ければ、例え知らなくても雰囲気と語感で察することが出来たかもしれない。

「月の障り……って何だ？二人とも知ってるのか？」

「アンタは一生知らなくていい熟語よ」

「ん、そうそう。乙女の秘密つてやつですよ」

瞳を閉じて茶の余韻に浸る振りをしつつ、全身の血が逆流するような不快感をやり過ごす。

瞼の裏に閃くのは、数年前までいた生き地獄の光景と、彼女が唯一心を許した少女の姿。

途端、苦しみが和らぐような心地がした。

(錬金術師は不可能だと言っていました。要は精神の問題。例えば信仰が無くともそれに勝る、鋼のような目的意識と能力さえあれば

……)

そうして一掬い一掬い、まるで素手で岩盤を削るような強引な苦行の末……

その指先が、目当ての物にかすつた。

(あつた！……生と死の境界を超越する魔導書、『ネクロノミコン』！)

心理掌握は汗で滑るカップを持ち直し、緩やかに溜め息を吐く。そして……一気に潜行した。牙を向く有毒な知識を、心理掌握の力でねじ伏せ取り込んでいく。記号も図解も全て脳に焼き付ける。

(あと……10秒……！)

パラパラとページを捲るのと大差ない猛烈なスピードで行えば、当然他に回す意識など存在しない。

まるで地獄の業火に焼かれる亡者のような表情を見て、3人ともギョツとして談笑を止める。

当麻が声を掛けようとした直後……

心理掌握は眼から涙を伝わせ、嘔吐した。

湿った音を立ててテーブルに溢れる吐捨物。黄土色の胃液がカップの中身と混じり合い、泥のような色合いに変化する。

唐突過ぎる展開に凍り付く3人の中で、一番早く硬直が解けたのは意外にもインデックスであった。

「大丈夫エイミ？お水いる？」

汚れたテーブルには眼もくれず、立ち上がって心理掌握の背を優しく擦る。

彼女が震える手で水を飲み、呼吸が落ち着いたのを見てからインデックスはお絞りに手を伸ばした。

「……高平原さん、病院まで連れていきましょか？」

「ん……またまた、大袈裟、ですよ、御坂さん……ああ、お二人とも、ありがとう、ございます」

汚れたテーブルを紙ナプキンとお絞りで拭きつつ、当麻とインデックスも心配そうな顔を見せる。

「御坂の言う通り、一度診てもらった方がいいんじゃないか？」

「確かに……いきなり吐くのはちよつと普通じゃないかも」

心理掌握は目を伏せ、静かに肩を震わせた。

苦痛に耐えているのか、あるいは……



「大丈夫です。これ以上は悪くなりませんから  
堪えきれぬ愉悦を殺しているのか。」

ネクロノミコンのコピーは成功していた。

## 第七話・回想（前書き）

今話もお食事中にご覧になるのはお勧め出来ません。グロいです。

## 第七話：回想

「……………無い……………無い……………ああ、なんて、無様な」

夕焼けも差し込まない入り組んだ路地裏で、冷えたコンクリートの路面に座り込みながら心理掌握は舌打ちした。

満身創痍となった自身の体をアウレオルスに回収してもらえば作戦完了だが、急遽予定を早めたために合流地点を決めていなかったのが裏目に出た。

ファミレスで携帯を落としてしまったのだ。

連絡が無ければ探すようには言っているから、最悪の事態と言う程でもなかったが。

心理掌握は来た道を振り返るが、脳みそをノミで削られるような苦痛の中で、タクシーを拾いに大通りに戻る気力は失せていた。

溜め息を吐きつつ瞳を閉じれば、疲れが出たか、不意に眉間の辺りから過去の映像が湧き出てくる。

記憶。懐かしくも唾棄すべき、どこにでもある悲劇的一幕。

「っ……………！」

力で押さえ込もうとするも、今一度思い返すのも悪くないと考え直す。

そのままゆつくりと思考の海に身を沈めていった。

\*\*\*\*\*

『特例能力者多重調整技術研究所』……………かつて一方通行が9歳まで在籍していた施設であり、数ある学園都市の暗がりの一つである。物心着く前から、心理掌握はその研究所の一角、鉄格子のはまった狭い個室に囚われていた。

彼女は置き去りであつた。  
チャイルドエラー

毎日毎日、遠巻きに聞こえてくる怒号と悲鳴。研究員は人間を手取り早く動かすには恐怖に訴えるのが一番だと熟知していた。最も人との触れ合いが大切な時期に、心理掌握が受けたのは拳と、罵声と、得体の知れない実験に付き合わされる苦痛だけだった。

食事は味の無い経管栄養剤。寝る時だけが、現実から解放される唯一幸せな時間。

そのまま成長していれば、感情を持つことすら無かつたかもしれない、そんな境遇に光が差したのは、彼女が6歳の時だった。

「あのね、わたし『れん』っていうの！よろしくね！」

その日突然連れて来られた、同い年位の置き去りの少女。

その歳で人間の悪意に慣れきってしまった心理掌握は、ただ人間がそんな表情をできるという事実に驚いていた。

「おなまえ、おしえてほしーなー」

「……名前は、無い」

「うーん？……じゃあお姉ちゃんって呼ぶねー」

よろしくよろしくーとはしゃぐ少女に、心理掌握は不意に残忍な愉悦を覚えた。

学校でお勉強できると勘違いした彼女が、実験に直面してどれほどの絶望に襲われるのか、と。

案の定、最初の実験が終わって帰ってきた彼女は火を吹くように泣いていた。

その腕や顔には痣や火傷があり、むずがる少女にどういう仕打ちがされたのかを物語っていた。

嘲笑ってやろうと考えていた心理掌握は、気が付いたら彼女のことを抱き締めていた。

全身で悲しみを表す彼女に更に鞭を加えることなど出来るはずが無かった。

言葉を知らない彼女が出来たのは、ただ抱き締めて幾ばくかでも不安を柔らげてあげることだけだった。

心理掌握の思いが通じたか、生き地獄にあつてなお、少女は徐々に明るさと落ち着きを取り戻していった。

「ねーねーお姉ちゃん！」

「……ん？」

「ここから出られたらさあ、二人でどこかお家を買って二人で住もう！」

「……………」

「花壇も作って、お花も植えて……自然がいっぱいあふれてるよ  
うな、ね！」

「……ん、そう、それはとても……素晴らしいことでしょうね」

希望だけが、そのほの暗い生を照らしていた。

実験の合間に筆記用具を盗んできては、その空想をコンクリートの自室に書き殴り、二人で飽きることも無く語りあった。

いつか自分たちも幸せを掴めるのだと、少女はもとより心理掌握まで考えるようになっていた。

心理掌握は変わった。笑い、怒り、泣き、それらを表情に出すことができるようになった。そしてそれを研究員に悟らせないだけの知性も

二人が11歳の時、特力研はもう超えようが無かったはずの1線を越えた。

彼らの研究が実を結ぶことは永遠に無いことは明らかだった。これ以上の執着は学者としての愚昧さを露呈するだけだと理解したとき、研究員も壊れてしまった。

実験対象の中には年齢が二桁に達した者もいた。そうした子供達を監禁しているという状況に、現実を見たくない施設の人間は常軌を逸した……

心理掌握は呆然と、もはやなんの意味を持つのかも分からない実験を終えて自室へと歩を進めていた。

研究者の下劣な笑みを見たとき嫌な予感はしていたが、よもや意味無く殺すこともあるまい、と高を括っていた。

その予測はある意味正しく……そして甘かった。

あらゆる悪意を知っていたはずの彼女も、狂った研究者からの辱めは受け止めきれなかった。

「ん……魂の、殺人とは、よく言ったもので……」

アハハハと、乾いた笑みが漏れた。顔を覆う手に力が籠り、バリバリと皮がむけていく。その指の軌道にあつた左目にも一切の加減無く力がかかり、鋭い痛みと共に視界が狭くなる。

「……ことなくそつたれな目見えなくなってしまえばいい。この世は須らく穢れていて、そんなもの映すくらいであれば……」

左目からこぼれる鮮血が床を汚す。

研究員に見つかれば拳が飛んでくるだろうが、彼女は拭く気にならない。

自室に戻る気力も果て、廊下に座り込む。見回りが来れば部屋へと蹴り戻されるだろうが、彼女にとってはもうどうでも良かった。

そう、汚れた自分のこと等どうでも良くて……

「……………れん」

生きる希望をもらった、唯一無二の親友。

あの無垢な少女を助けなければならぬ。

しかし……どうやって？

能力も体力も無い二人が、どうやって学園都市最高峰のセキュリティテ

イを突破出来るだろう。

「……それでも」

それでも、彼女がこれ以上傷つくことがあってはならない。心理掌握は震える足に力を入れて、壁によりかかるようにして立つ。今の彼女に出来るのは思考することだけだ。

研究員の性格、行動パターン、施設の出入口、備品の位置、他の子供達の監禁場所……役に立ちそうな記憶を可能な限りかき集め、突破口を探っていく。

しかし元より囚われの身である彼女では、いかに聡明であろうと情報不足は如何ともしがたい。

「……知識さえあれば」

きつと、正解が見つかるはずなのに。

「それさえ……それさえあれば！」

心理掌握は壁に腕を叩きつけた。

もし彼女に肉体強化の力があれば、そのままコンクリートを崩せたかもしれない。

念動力があれば、その激情のおもむくまま研究所を破壊したかもしれない。

しかし 力を入れすぎて腕の骨に罅が入った彼女は、全く異なった感慨を抱いていた。

「……人間。そう、悪意の源泉はいつだって人間。如何に物理法則をねじ曲げられても、人間はそれ以上の、想像もつかない悪意をもつて私達を陥れる……」

ならば……悪意を生み出す精神世界そのものを統御出来れば？

汚い心をこじ開け、纏めて縛ってぶち殺せば？

「それが、今の私に必要な」

たった一つの、能力。

この時、レベル0だった心理掌握の『自分だけの現実』が、さながらビッグバンのように爆発的な広がりを見せた。

彼女の脳内に何十という声……否、五感で表現しきれない「情報」が雪崩れ込む。

心理掌握は己に起きた異変に硬直し、遂に気が触れたかと身構えるが、それまでの思考の果てのこの現象に対し結論を出すのは早かった。

「まさか……読心能力が、目覚めたとでも？」

自然、速くなる鼓動に胸を抑え、溢れ返る思念の一つに照準を合わせる。

『クソ！どうしてアンチスキルなんかが来るんだよ！上の連中は何やってんだ！とにかく捕まる前に逃げないと……』

「アンチスキル？確かこの学園都市における、治安維持の……」

そこにきてようやく、外の様子がおかしいことに気が付いた。

爆音と銃声、そして怒号がひっきりなしに響いてくる。

その割には、子供達の悲鳴は聞こえてこない。

心理掌握の足に力が戻る。この混乱に乗じれば逃げ出せると理性が囁いている。

救助への甘い期待など抱いていない。しかし研究員にとってもイレギュラーな事態が起きているのは事実。

痛めつけられた体で風のように走り、内からは開かない自室の扉を



勢い良く開ける。

「れん！れん！ここから逃げましょう！今なら大丈夫よ！」  
ベッドでこちらに背を向け横たわる姿に叫ぶ。

満面の笑みを浮かべ、高揚した気分のまま。

しかし、相手はピクリとも動かない。

「……………れーんー？ほら、いつまで寝てるの！」

幸せな明日が迎えられるかもしれないのよ、と続けようとして体に手をかけ、顔をこちらに向ける。

明日どころか、その言葉すらも永遠に紡がれることは無かった。

心理掌握は一瞬、それが人形であると誤解した。

何故なら、少女の瞳孔にはなにも収まってなくて、ただぼつかりとした穴が空いているだけだったから。

幾筋もの涙の軌跡に混じって、汚れた白いナニかが流れ出しているのが見えたから。

……………人形？ではこの柔らかい肌の感触は何だというのだろうか？

そう、本当は気づいているのだ。

心理掌握の理性は冷徹に、目の前の存在は人形などではなく、義理の妹であり親友であった少女の死体ですよ、と感情に語りかけた。

「あああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああっ！」

それは何処にでもある、悲劇的一幕。

\*\*\*\*\*

「だから生き残った私は、あの子を蘇らせなければ」

自分に言い聞かせるように、回想を終えた心理掌握は呟く。  
それに呼応するように、左目の義眼がひどく疼いた。

## 第八話：拒絶

この路地裏を集合場所に指定したのは、少しばかりまずかったのかもしれない。

ここ最近ケアレスマスばかりだ、とげんなりしながら心理掌握は顔をあげた。

こちらを見下ろしてニヤニヤ品無く笑うスキルアウトが3匹。

タイプ的には、レベルの低い能力者を痛めつけ悦にいる雑魚であるうか。

「棚からぼた餅……ってか？ここの路地なら誰も通りかからねえしよ」

「常盤台だったら金持ってんだろ？犯して写真取って親に脅しかけりゃいくらでも金絞れるんじゃないやね？」

「ギャハハ！そりゃ名案だ！」

好き勝手に喚いてくれる……と彼女は溜め息をつきたくなる。

なるほど他のお嬢様ならいざ知らず、自分なら相手の拳が壊れるまで殴られようと眉毛一つ動かさないでいられるだろう。

今自分を殺すことにメリットは無い。ならどうなぶられようと構わなかった。

死にさえしなければ。

この計画さえ完遂出来れば。

未だ演算もままならない朦朧とした頭で、そんなことを考える。

「でもよ、こいつさつきから何も反応してねーけど……まさかもう薬漬けのポイ捨てとかそういうオチ？」

「オメードラマの見すぎ。常盤台だしまだ新品だろ」

そんじゃあ早速、とスキルアウトの毛の生えた不潔な指が胸元を襟元をまさぐる。

心理掌握は瞳を閉じる。恐怖も怯えもない。ただ諦感が全身を支配していた。

これくらいあの子の受けた苦痛に比べればなんてことは無い、と。

「…………その汚え手を離せよ」

路地裏にいた4人は、ほぼ同時に声の聞こえてきた方向に顔を向けた。

そこにいたのはツンツンとした黒髪の、ついさっきまで会話していた少年だった。

「んだてめ？」

「そいつの知り合いだ…………聞こえなかったか？手を離せって言うんだよ！」

困んでいた3人は顔を見合わせると、さもおかしそうに笑い合う。

そして、唐突に少年の方へと向き直る。

「おーおーそうだよな。離さなくっちゃあ殴れねーもんな」

その笑みを怒りに変質させ、3人は歩み寄る。

それを見て少年　上条当麻は拳を握り、深呼吸して心の準備を整える。

本来なら連れて逃げるのがベストだが、前後不覚のあの様子では無理がある。

だが、例え勝目が薄くとも、ここで退くなんてあり得ない。

そして　3対1の殴り合いが幕を開けた。

\*\*\*\*\*

勝負は圧倒的だった。

それは弱い者にしか拳を振るえない卑劣漢と、弱い者のために拳を振るう英雄ヒーローの埋められない差。

場数を踏んだ当麻の拳は、自分でも驚く程に鋭くなっていた。

「く、そ……覚えてるよ！」

パラパラと逃げていく3人に、肩の力を抜く当麻。

心理掌握はどんな顔をすればいいのか分からなかった。

「ん……ありがとう、ございます」

「怪我は無いか？」

「ん、大丈夫です。……というよりなんでここに？」

「携帯、忘れただろ？それに高天原の体調も心配だったしな」

「ん、一人で……ですか？」

「いや、御坂達も通りの向こうを探してる」

そこで当麻は何気なく右手を差し出した。

「立てるか？」

「ん、問題ありません」

一瞬迷うが、救急車を呼ばれても面倒だと右手をしつかり握る。

心理掌握を引つ張り立ち上がらせる力は、思ったよりもずつと強かった。

「さて、と。携帯を渡す前に約束してくれ。病院に行ってくれるか？」

瞳を覗き込むような、真剣な問いかけ。

どうしたものか、と心理掌握は心の中で呟いた。

この体調不良はそもそも身体医学的方法論でどうにかなる類いのものではない。時間はかかっても自然治癒を待つ他無い。

が、この雰囲気では適当に誤魔化してもばれそうな気がする。

錬金術師に無駄足を踏ませることは何の遠慮も無いが、こちらは一時的にせよ能力が使えない状態。へそを曲げられると計画に支障を来す。

となると、今出来るのは時間を引き延ばすことだけ。

「ん、なんとというか……慣れてますね」

深い意図も無く呟いた言葉に、相手もキョトンとした顔を見せる。

「え、何が？」

「ん……こうして人を助けることに、ですかね。あんな場面に出くわしたら普通は怯むものだと思いますが」

「まあ、慣れてるからな」

質問に答えていないが、相手はそれについて言及してこない。

うまく話を逸らせたことに安堵した心理掌握は、ちよつとした悪意から質問を重ねてみた。

「ん、助けてもらつてこんなことを言うのも何ですが、ご自分の行動は正しかった、とお思いですか？」

「……え？いや、当たり前だろ？」

一点の曇りも無い、明朗な返事。

その予想通り過ぎる答えに心理掌握は苦笑した。

その子供らしい正義感と、それを誇りを持って抱いていられるぬるい環境を思つて。

「ん……貴方は自分の選択に対し疑いを持たない。それは芯が強いように見えるただの独りよがり過ぎません。貴方はこの先挫折し、絶望し、壊れて己を呪うでしょうね」

「……え？」

それはどういう意味か、と聞き返す前に、上条当麻の意識は唐突にブツンと途切れていた。

はったりと倒れる少年を一瞥すると、心理掌握は気だるげに顔を上げた。

「ん、連絡出来ずにすいません」

「全然、大したことでは無し。生存しているだけでも驚嘆に値する」  
180を超える長身にところどころ焦げたスーツ。

錬金術師は身体の火傷も意に介さず、心理掌握を見下ろしていた。

「ん、ステイルと交戦しましたか。辛勝だったようですが……」  
「……撫然、『こんなもの』を使つての勝利など、何の名誉も無し」  
「ん！本当に使つたんですかあれ？ちよつとしたジョークのつもりだつたんですが……」

素直に驚きを見せる心理掌握に、アウレオルスは態度に苦々しさを滲ませながらあるものを手渡した。

二連発式デリンジャー。小説や映画で護身用としてよく登場する小型拳銃だ。

それは万が一の奇襲に備えて渡しておいたものだった。

とはいえ心理掌握も本当に役に立つとは考えておらず、「純白のスイツに拳銃は様式美」という至極どうでもいい遊び心のつもりであった。

神父は私の攻撃手段に完全な先入観を持っていた。土壇場において袖口に仕込んだソレで撃ち抜くのは、当然、造作もないこと」

「ん……一応確認しておきますけど、賢明な貴方のこと、殺してませんよね？」

「当然、倒した後に入念に記憶を改鼠し、傷を治療して捨ておいた。もはや二度とインデックスを発見することは叶わぬだろう。異常も漏れまい」

「上々！いやはや、やはり有能なパートナーがいると謀も楽ですね」  
上機嫌に声を弾ませたが、直ぐに顔をしかめて頭を押さえた。

「ん、錬金術師。この体調不良の改善にはどれくらい時間がかかりますかかね？」

「自然、治るように治るだろう……としか言えんな。そも信仰を持たない人間が魔導書を征服するなど前例がない」

「ん、やはりそうです、か……って待って下さい。普通に黄金錬成で治せますよね？」

「血管の拡張等が原因の頭痛であれば治せるが、魔導書の毒によるものでは意味が無い。黄金錬成により『改善した姿』を思考したところでまた直ぐに毒に苛まれるだけであろう」

「ん……なるほど。魔導書の毒だけを抜くイメージが出来ないから治せない……まあそれが出来たらインデックスの記憶障害も直接治せますよね」  
心理掌握は納得したように頷いて……

そして、奇妙な沈黙がながれた。

「ん、錬金術師……私、寒いんですけど」  
「それが？」

「ん、だから、早く連れて帰って欲しいんですけど……」  
「間然、どのような手段で？」

そこまで言われて、心理掌握の思考が停滞し出した。  
頭痛ではなく、悪い予感によって。

「んん？いや、私言いましたよね？『回収しに』来いって。別に顔を出せと言ったわけじゃないんですが」

「当然、それは記憶している……それ故にいかなる手段を用いて回収すればいいかをこうして聞いているわけだが？」

ここにきてまさかの噛み合っていない会話に思わず頭を抱える。  
錬金術師はわざとやってるわけではない、とどうにか苛立ちを抑え、色々と考えを巡らせた。

「ん、ワープとか……できます、よね？」

「当然……良く地理を把握した場所であればな。当然、一度しか行つたことのない君の部屋へは不可能だが」

こめかみに青筋が浮かんだ、気がした。

もとより彼女は非常に我慢強い性質である。しかし体調の悪化に疲労、焦りと度重なり、最後にこれでは……いかな心理掌握と云えど自らを律することは出来なかった。

「じゃあおぶれよバーカ！この役立たず！」



疲労と寒気によるまさかのマジギレ。

無論憔悴した少女が牙を剥いても、錬金術師は涼しい顔を崩さなかつた。

「騒然……それは構わぬが、心理掌握の力を行使を出来ぬのなら、相当に目立つことになるう」

心理掌握はなおも噛みつこうとしたが、不思議なことに思い当つた。錬金術師は先程も口にした通り有能だ。そういう男が、本当に考え無しに顔を見せるだろうか。

30秒、沈黙考した後、まさか……とばかりに口を開いた。

「ん、錬金術師、もしかして掃除させたり茶を淹れさせたりしたの、怒ってます？」

「……………」

錬金術師は答えなかった。

第9話：謀略（前書き）

お待たせしました

## 第9話：謀略

颯爽と去っていった錬金術師の背中を歯ぎしりしつつ見送り、心理掌握は上条当麻の手から携帯電話を取り返す。

かける番号は、いつでも動かせる派閥の中の一生徒。

本当は能力が一時的にでも使えない状態で駒を動かすのは気が進まなかったが、このまま御坂美琴に見つかって面倒なことになるよりはましだった。

あくまで眼を瞑れるリスク……今一度確認した心理掌握は、発信のボタンを押し込む。

ワンコールと経たずに繋がった電話口に、たった一言告げた。

「D o <sup>ゃれ</sup> i t」

唐突に、ぐにやりと視界が歪み、そのまま渦を描くように世界が捻れていく。

心理掌握は落ち着いて瞳を閉じ、開く。

そこに広がっていたのはいつも寝起きしている自室の光景だった。

疲労した体をベッドに横たえる間もなく、ドアをノックする音が響いた。

「ん、どうぞ」

訪問者にある程度の確信をもって返事をする。

ゆっくりと開かれたドアから覗いたのは、御坂美琴よりさらに短い癖毛の少女の顔だった。

一見、何を考えているか分からないような表情を心理掌握へと向ける。

「……大丈夫？」

「ん、ちょっと体調不良で帰れなくなっただけです。送っていただいてありがとうございます」

「……そう」

少女はそれで興味が失せたのか、そのまま背を向けて帰っていった。遠ざかる足音を聞きながら、心理掌握は苦笑した。

「ん、ドアは閉めて欲しかったですけどね……」

本来こんな無神経な真似に黙っている彼女ではないが、派閥の中の一握り、本当に役に立つ駒に対してはありのままに振る舞うことを許していた。

その方が道具としてスムーズに使えるからだ。

「空間転移系の能力者は目に付きやすいですから、ね。代わりを探すのも大変ですし」

心理掌握が選りすぐった腹心は、全員がギリギリレベル3であり、常盤台レベルではなんてことの無い普通の能力者である。

共通点は、能力が使い方によっては便利であること……そして動いてもあまり目立たないこと、である。

派閥の中のレベル4が一齐に動けば不審に思われるのは必至。その逆をいく考えだった。

例えば心理掌握をレポートさせた少女。その能力「座標置換<sup>ソフトチェンジ</sup>」はただ「右手と左手で触れた物を入れ替える」というだけのものではない。

片手で自分の体に触れ、もう片手で何かに触れることで一応自分の体を移動させることができるため、区分はレベル3ということにはなっているが、一見すれば使えない能力でしかない。

しかし……発動に任意で時間差をつけられれば？

途端にその汎用性は広がるだろう。一度触れさえすれば良いのだから、空間転移系能力の下位互換とすら言えなくなってしまふ。

心理掌握の心を探る力と、ほとんど一律な能力測定による可能性の取りこぼし。その隙間を縫って集めた人材だった。

心理掌握は綿のように疲弊した体と相変わらずの頭痛に閉口しながら

ら、今後の予定を立てる。

と言っても、何をするかは決まっている。決めなければいけないのはどのタイミングで、何をすべきなのか。

(……決行は夜。準備は錬金術師に手伝わせる。御坂美琴とはもう少し打ち解ける必要が……いや、口実次第でなんとかなるか。後は儀式の邪魔をさせないような対策を立てる。その間錬金術師が動かさなくなることを考えると……戦力的に派閥を使う必要がある、か) 脳内で様々な取捨選択が行われ、取るべき手段が絞られていく。

こういつた過程が彼女は好きだった。どんな悲壮な目的であれ、綿密に計画を織りあげていく楽しみに変わりはない。

(上条当麻には目に見えない心理掌握の力が相性がいい。問題無い……後は遠方からの狙撃か。これも「あの子」の能力を使えば対策は万全。学園都市統括理事、アレクスター???????が動くかは微妙なところだけど……出方といっても、まずは「グループ」に片付けさせようと考えるはず)

なら、依然問題無し。

学園都市の暗部、第一位も所属する組織に対し、心理掌握は一秒とかからず結論する。

己の優位に驕っているのではない。その能力故相手の素性、実力、事情を完全に把握しているのだ。

(……情報が伝わらないよう、能力も駆使して完全に統制。よって不意打ちはあり得ない。相手はそう考えているはず。だから各個撃破のリスクをおかしても散開し、四方から強襲するのがベスト……と相手は考える。)

にたり、と心理掌握は獰猛な笑みを浮かべる。

例え心が覗けなくとも、少し頭を使えば、その心の動きは簡単に推測できる。

そして、それが外れたことは数える程しかない。

最も、推測出来たとして、最適な行動をとれるかは別問題であるが

……

ガチャリ、と何の前触れもなくドアが開いた。

立っていたのは、先程自分を路地裏に置き去りにした男の姿。

「……手下に送らせたか。撫然、最初からそうしていれば良かったものを」

つまらなそうな仏頂面を見せる錬金術師に、心理掌握はピクリと頬をひきつらせる。

「ん、当然お分かりだと思えますが、能力が一時的に使えないというのは、派閥の人間を動かすのを躊躇うのに十分な理由なんですよ……いくら使えると言っても寄せ集めであることに違いありませんから」

そうか、と錬金術師は気のない返事をし、手近な椅子に腰掛けた。

そのまま無造作に心理掌握と視線を合わせる。

やや上目遣いに、前傾姿勢で。

それだけの僅かな挙措で、彼女は相手が何を言わんとしているかを察した。

「ん、そう慌てないで下さい。能力が使えるようになったら直ぐに実行に移すつもりですから」

もう目処は立っているのに、せっかちな男だ……そう考えて微かに笑う。

しかし錬金術師の次の言葉は、心理掌握の想像を大きく外れていた。

「間然、今直ぐに実行に移せぬか？」

疑問系だが有無を言わせぬ、これまでとは違った調子。

まるで獣の吐息に晒されたような威圧感に、少女の肌が粟立つ。

目の前の男は自分の意思を変えるつもりはないと、言外に告げていた。

「ん、無茶言わないで下さい。心理掌握も無しにどうしようと？にかく数日待って……」

「当然、ならば貴様は自分の意思に反して計画を遂行することになる」

数秒の間があいた。

相手は神の領域に足のかかった魔術師であるという現実が、今更のように思い起こされる。

「ん、私を脅迫するつもりですか？別にいいですよ、貴方の悲願が潰えるだけですから」

そう言つて飄々と笑おうとするが……場の空気がそれを許さず、口角がひきつるのを抑えられない。

彼女は自覚してしまったのだ。今の立場の脆弱さを。

「今、この場で貴様に『命令』することその憂いも断てよう。例え心理掌握の力を取り戻そうと、そも異常を知覚出来なければ黄金錬成の暗示は打ち消せまい……あまり私を見くびるなよ、小娘。私にはネクロノミコンなど不要なのだから」

ゆっくりと、心理掌握を見下ろすように立ち上がる錬金術師。

その姿を見て、彼女は結局能力に頼りきりでしかなかった自分の行動に嫌気がさした。

行き当たりばったりで、いつも後手後手に回る。これなら施設にいた時の方が頭を使っていたらう。

それでも　まだ立場が完全に逆転したわけではない。

現に錬金術師も、威圧するようにねめつけてくるだけで、実際に行動に移ろうとはしない。

「ん……幻想殺しのことを考えているのでしょうか？」

「！」

優位に立っているはずの魔術師が、僅かに動揺の色を表す。

「どんな力だろうと、彼の右手の前にはなんの意味もなさない……  
なら私の頭にかけられた貴方の暗示も、ふとした拍子に解除されて  
しまつかもしれない。それが貴方の目的を達成する前に起こらない  
とは限らない。そうなれば私は当然インデックスを治すという契約  
を破棄しますから、貴方はただ働き……」

そこでちよつと間を置き、水差しから水を飲む振りをして相手の真  
意を考える。

ややあつて、一つの可能性に思い当る。

「今私に凄んだ貴方の態度。それ自体が暗示????になっているのでしょ  
う？ いわば非常に軽度な命令。幻想殺しに破られても違和を感じな  
い程の……心理的側面と能力的側面から、私が貴方との約束を破ら  
ないよう揺さぶったというわけですか。やるのがこすいですね。  
口約束だつて守りますよ私は」

錬金術師は、答えない。

彼女もそれ以上追求せず、再びコップの水を仰ぐ。

ややあつて、心理掌握は唐突に立ち上がった。

「しかしまあ、善は急げといえますし……いいでしょう、今から計  
画を実行に移しましょう」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3778n/>

---

とある科学の心理掌握

2011年4月23日22時11分発行